

歴史民俗資料館特別展

屏風祭

—池田の文化をひらく— **その2**

歴史民俗資料館では、10月15日(土)から12月4日(日)まで、「屏風」をテーマに池田の文化を振り返る特別展を開催します。9月号では、近世の池田にゆかりの深い、福原五岳筆《洞庭湖図屏風》をご紹介します。

福原五岳《洞庭湖図屏風》

この屏風は、縦154・6センチメートル×横351・0センチメートル、六曲一雙の大作です。

屏風は右側を右隻、左側を左隻といひ、縦書きの文章のように右から左に向かって鑑賞します。この作品では、左隻の画面左下に、「安永元年壬辰季冬寫／於樂聖草堂／五岳福元素」と記されています。このことから、安永元年(1772)に、「樂聖草堂」という場所において「五岳福元素」という絵師が本作を描いたということが分かります。

江戸時代に京、大坂で活躍した絵師・福原五岳(1729～99)は、当時流

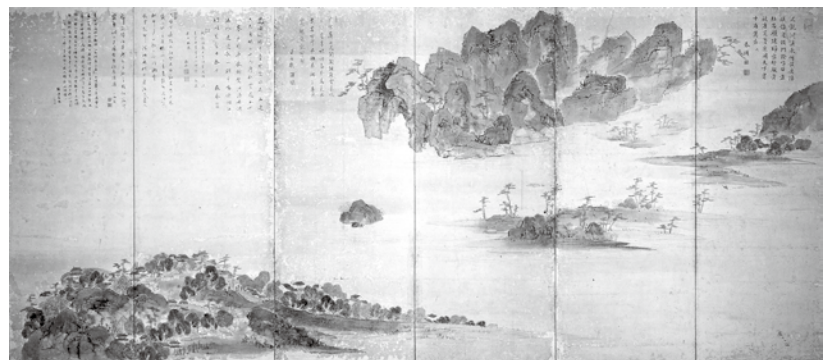
行していた中国風の山水を得意としました。樂聖草堂とは五岳の大坂の居宅です。

作品を見ると、雄大な湖岸の風景が瑞々しく描かれています。ここに描かれているのは、中国湖南省の名勝・洞庭湖です。湖岸には、唐代の詩人・杜甫の「登岳陽樓」という詩で知られる岳陽樓があり、当時日本の知識人のあこがれの場所でした。

画面の上部を見ると、洞庭湖を詠じた詩文(賛)が寄せられています。その中に「臥遊」という言葉がみられます。「臥して遊ぶ」すなわち「身をよこたえたまま(山水に)遊ぶ」という意味です。部屋の中で書画を鑑賞し、その世界に思いをはせ、心を遊ばせるという方法が、文人たちの絵画の楽しみ方でした。

池田の荒木李谿と文人たちの交歓

この屏風の成立には、近世池田文化の象徴的存在ともいえる荒木李谿(1736～1807)が尽力しました。李谿の弟・茂は、師の五岳に屏風の制作を依頼し、さらにその屏風に兄と親交がある大坂の文人たちの詩を加えることを頼みました。そこで李谿は、安永3年



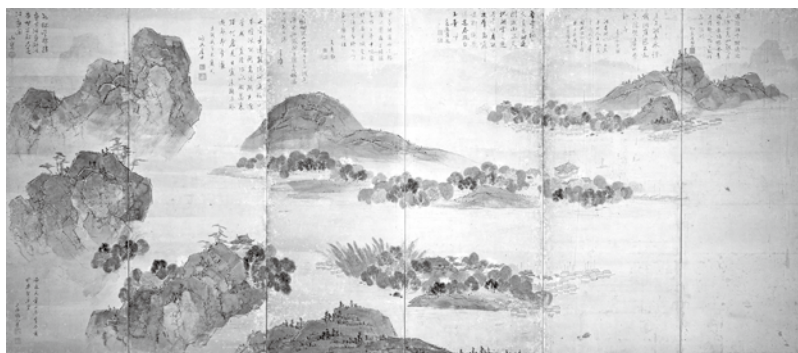
福原五岳《洞庭湖図屏風》(右隻)
安永元年(1772) 大阪歴史博物館蔵

(1774)大坂北野の金崎氏(尼崎屋七右衛門)の別邸で酒宴をひらいて彼らを招き、この屏風に揮毫してもらったようです。

賛を記したのは李谿が参加していた漢学塾の懷徳堂と、漢詩結社の混沌社の、文人たち14名です。彼らは、五岳の描いた洞庭湖を前に、山水に遊び、想いを詩にあらわし、交友を深めたのでしよう。文人たちの楽しい交歓のさまが

浮かびあがってきます。

また、屏風は折り曲げて使うことを前提に描かれています。この作品も折り曲げて立てることで、風景に奥行きが生まれます。正面からだけでなく、左側や右側から眺めてみると、絵の見え方が違ってきます。ぜひさまざまな角度から、山水の世界に親しんでみてください。



福原五岳《洞庭湖図屏風》(左隻)

◆問い合わせは歴史民俗資料館
☎751・3019